

宮沢賢治作品の「装景樹」と植生景観 ——「田園を平和にする」白樺、獨乙唐檜、やまならし——

三浦 修*

要 旨 岩手県の自生種のシラカンバ（カバノキ属）、導入種のドイツトウヒ（トウヒ属）、導入種のポプラ（ヤマナラシ属）の植栽によって、当時の農村景観を改善できると賢治は考えた。現在の農村景観計画に相当するこのアイデアは、田村（1918）が提唱した装景に由来する。ここでは、3属の樹木を賢治の「装景樹」と呼び、どのように作品に描かれたかを詳細に記載した。賢治が実際につくった景観計画案やその実践のプロセスをも明らかにした。作品描写の分析によって、賢治の科学（植物生態学など）的リテラシーを考察した。さらに、装景樹の着想について、当時の林学や植物学において樹木や森林の美が研究されたことや、造園学とその実践学が確立したことなどの学問的な時代背景を考察した。

キーワード 宮沢賢治、装景、シラカンバ、ドイツトウヒ、ポプラ

はじめに — 修学旅行復命書 —

宮沢賢治は、その創作活動のほぼ半ば1924（大正13）年5月、花巻農学校修学旅行の生徒を引率して、自身3回目の北海道旅行を行った。帰着後に提出された修学旅行復命書は、行程、視察内容、成果等を報告する校務文書を越えた内容をもっている。その中に、帰路の札幌から苫小牧までの車窓から観察した北海道と郷土岩手（以下、植物の分布域などを除き岩手と記す）の景観を比較した次のような記述がある。

車窓石狩川を見、次で落葉松と獨乙唐檜との林地に入る。生徒等屢々風景を賞す。（中略）北海道の風景、その配合の純 調和の単 容易に之を知り得べきに對し、郷土古き陸奥の景象の如何に複雑に理解に難きや、暗くして深き赤松の並木と林、樹神を祀れる多くの古杉、楊柳と赤楊との群落、大なる藁屋根 檜の垣根、その配合余りに暗くして錯綜せり。而して之を救ふもの僅に各戸白樺の数幹、正形の獨乙唐檜、閃くやまならし赤き鬼芥子の

一群にて足れり。寔に田園を平和にするもの樹に超ゆるなし。

宮沢賢治（以下、賢治と記す）の捉えた岩手の暗くて錯綜した景観は、主として集落景観である。比較された北海道の開拓集落は、アメリカのタウンシップ制に倣った格子状の土地割をみせる開放的集落景観である。そして、その錯綜し暗い景観の改善策として「田園を平和にする樹」の植樹を提起する。このような植物による景観の改善策のアイデアには、賢治が確実に読んだ田村剛（1918）の『造園概論』の影響があった。そこでは、現在の地域景観計画に相当するような内容をもつ「Landscape Architecture」が「装景」と定義されている。さらに、賢治の集落景観の改善策は植樹に限られていない。上記の報告文の前段は、北海道の入植者の家屋と比較した岩手の農家の改善策は、「早く我等が郷土新進の農村建築家を迎へ、従来の不経済にして陰鬱、採光通風一も佳なるなき住居をその破朽と共に葬らしめよ」と過激なのである。これらの主張から、賢治が現代の農村景

* 元岩手大学教育学部

観計画の先駆者などと評価されるかも知れない。

しかしながら、何次にも亘る耕地整理事業や農村改善事業の実施は、第二次世界大戦後のことであり、現在では、「郷土古き陸奥の景象（＝景観；筆者注）」が文化景観として、その保存が重要な課題になっている。たとえば、農山村地域において、人々の生活と周囲の自然との関わりの中で形成された里山や棚田で代表される農村景観が、地域振興、観光、防災など多面的な機能をもつと期待されている。『日本の文化景観』（文化庁文化財部記念物課監修、2005）には、各地の農林水産業に関わる景観が多数リストアップされている。賢治が描き続けた作品の中に岩手の景観を再現することは、現在の文化景観の保存と評価の基礎的資料にもなろう。

自然科学的リテラシーを獲得した賢治によって描かれた多数の作品が、20世紀初期の岩手の自然環境を記録した貴重な資料であると、筆者は考えている。これまで筆者は、植物生態学や植生学の視点から賢治作品を読み解いた、3つの研究結果を報告した。1960年代に始まった燃料革命によって失われたり、質的に変化したりした過去（賢治が活動した時代）の里山の植生景観における変化や、現在では、いわゆるレッドデータプランツにランクづけられている希少植物の評価を、作品に記載された植物を手掛かりに分析した（三浦・平塚、2004）。獲得されたであろう科学的知識が、膨大な作品に必ずしも活かされていないという、いわば賢治の科学的リテラシーの問題点をも指摘した（三浦、2005）。また、馬産地岩手を代表し、多くの作品の舞台となった岩手山麓や北上山地に広く展開した草地景観を、賢治はどのように科学的に了解していたかという問題について、火入れ（野焼きともいわれる）や賢治の造語である「三年輪採」をキーワードとして、関係作品を通して考察した（三浦、2006a）。

まさに現代の課題である地域景観計画、具体的には農村集落の景観計画に関わる報告文を、賢治は書き残し、かつ実践さえ試みていたのである。景観計画のキーワードが作品にもみえる「装景

である。計画の主要な景観要素が、表題の3種（実際には3属の種）の樹木である。岩手の集落景観は、「白樺の数幹、正形の独乙唐檜、閃くやまならし」を植栽することによって改善されると、賢治は提示した。それが、この論文で、賢治の「装景樹」と呼ぶものである。

はじめに、作品に対するこれまでの筆者の立場（植物生態学や植生学に景観生態学の視点も加える）を維持しながら、作品中のカンバ属、トウヒ属、ヤマナラシ属の植物を、種の特長、立地の特性、植生学（群落学）的記載の適否などに留意しながら、網羅的に抽出記載した。その記載には、これまでよりも、対象植物に向けられた賢治の「精神性」、たとえば、宗教的、心理的、心象的な表現にも注意をはらった。なぜなら、現在の景観の概念には、しばしば「美」の概念をも含むからである。

これらの分析や記載の結果を踏まえて、装景樹をめぐる賢治の科学的リテラシーについて、適否を踏まえて考察した。装景という語を、どこからどのように受け取ったのか、装景や装景樹を作品にどのように描いたか、さらに実際に計画案がつくられたのか等を明らかにした。

盛岡高等農林学校において、賢治が科学的リテラシーの蓄積を開始した時期から、装景の概念に含まれる花壇の設計や施工に精力的に取り組んだ羅須地人協会の時期には、植物学や林学では、植物や森林の「美」が研究対象になった。加えて、学問としての造園学が確立する。このような時代背景をも明らかにした。

I 賢治の捉えた暗い景観

1. 暗い景観

札幌を発して間もなくの車窓景観は、「本道独特の散点状村落並にその家屋の構造多少移住者の郷土を示すもののあるを見る」であった。この景観を「本道独特」と形容しているので、郷土花巻付近でも散居村景観（村田、1948）を賢治が見ていたことになる。『春と修羅 第三集』の詩「道への粗朶に」の詩句「陰気な幾十の部落なのに」が、下書稿では、「陰気な散点部落なのに」と表現さ

れている。散居の建物に、賢治は移住者の出身地をも読む。沿線の岩見沢市栗沢町の大字には、「砺波（富山県旧砺波郡から）」、「越前」、「岐阜」、「三重」などは、入植した団体の出身地に因む地名である。車窓から地名を知ることが不可能なはずで、持参した1916年測図、1919年発行の5万分の1地形図「江別」の地名と対応させた読図によるものであろう。

「郷土古き陸奥の景象」として列挙された、アカマツ並木とアカマツ林、スギの杜叢林、ヤナギ類とハンノキに縁取られた大小の水路網、ヒバ類の垣根を回した茅葺き屋根の農家は、岩手の、正確に言えば、現在ではほとんどが失われた北上河谷平野の北部水田地帯の景観要素である。北海道の整然とした景観とは対照的に、この景観を、暗く、錯綜したものと、賢治は捉えるのである。ところが、実際の作品に暗い景観と明示されるものは少ない。

手入れの行き届いた陽樹のアカマツ林は明るい。『冬のスケッチ』の8葉には、暗いアカマツの並木が描かれている。「ここの並木の松の木は／あんまり混み過ぎますよ／（中略）／なにもかもさっぱりみえないぢやありませんか。すこし間伐したらどうです。」に続けて、9葉には、「雪がふかいなら／仕方ありませんけれど／これではあんまり／みちがくらすぎませんか。」とある。この詩は、和賀仙人の鉾山や湯田村へ通じる馬車鉄道と道路が併存する並木の景観を詠ったものである（小野、1982）。賢治は、鬱蒼とした混んだ並木に遮られて、客車の窓からの眺望が妨げられることにクレームを付け、間伐しろと言っている。

歌稿Bの「大正5年10月より」の短歌、「松並木／監獄馬車の窓にして／しばしばかつと／あかるむうつろ」にも、当時のアカマツ並木の景観が描かれている。格子あるいは縦格子を通じてのみ外光の射す監獄馬車の暗いイメージが並木の列からの木漏れ日に喻えられている。

小野（1982）の扉写真（元の写真には、街・きたかみ編集委員会、みちのく民芸企画編集（1980）：『きたかみの今昔 写真帖』からの引用

との断り書きがある）に、これらの詩句の描写を証拠づける松並木景観が写っている。道路の両側に密植されたアカマツ並木の林冠層は、互いに接し、樹幹の間にも低木や草本の下層植生が発達して、まさに暗いトンネル状になっている。現在のいわゆる街路樹景観からは想像できない当時の並木に期待される効果が描写されている。それは地吹雪や吹雪を防ぐ防風林や防雪林の機能をもつもののなのである。

2. 風景と景観

先に掲げた修学旅行復命書の一節に「北海道の風景、その配合の純調和の単容易に之を知り得べきに對し、郷土古き陸奥の景象の如何に複雑に理解に難きや」と風景と景象の二語が使用されている。賢治の作品で多用されるのは風景であるが、景観もまた『春と修羅』の〔風の偏倚〕などに散見される。ドイツ語のLandschaftを訳出した植物学者の三好の著書（三好、1902；1910）でも、景観と風景（景色も）は厳密に区別して使用されてはいない。ただし、視覚が捉えた植物で構成された「映像」に対して景観と表現されるように読みとめることはできるが、個々に検討すると曖昧である。これらの著書にも景象はない。報告書の景象は、眼前に展開する映像ではないことを表すために使用したのかも知れない。

近年は、景観の語が多分野で多様な使われ方をしているので、景観と風景の使用法を議論し、両語の定義を呈示することが必要であろう。しかしながら、それは別稿に譲り、以下のような仮の定義を与えて記述する。風景も景観も、見る主体と見られる対象から成り立つ。風景は、見る主体側に、言い換えれば論者に主たる関心がある場合に用いる。同様に、作品と密接に関わる対象や心象風景も風景と言う。景観は、見られる側に相対的な重心をおいた場合、つまり対象に主たる関心がある場合に用いる。実際には、両者の区別が曖昧になったところもある。

II 「閃くやまならし」

ヤマナラシ属 (*Populus*) のヤマナラシ (*Populus sieboldii* Miq.) は、山地の日当たりのよい乾燥した斜面に生育し、岩手県でも普遍的に分布する落葉高木の典型的な陽樹である。特徴は、賢治が「閃く」と形容したように、やや小形の三角形から広卵形の葉が風に揺れやすく、葉の表面はやや光沢のある濃い緑、裏面は淡い緑で、揺れる葉群がチラチラと輝く。『牧野日本植物圖鑑』(牧野、1940；賢治の蔵書は1925年発刊の『日本植物圖鑑』(『新校本宮澤賢治全集』第16巻；2001)であったが、今回閲覧できなかった。引用箇所には両者に差異がないと推定した)に、「葉柄兩側ヨリ壓扁セラレ從テ葉ハ風ニ動カサレ易シ」と、風に揺れやすい葉柄の構造が明記されている。とくに葉柄上部が葉面と直角な側方から圧されたように扁平になるが、賢治の作品には、これについての記述が全くない。わずかの風にも揺れる葉群は、閃きとともに葉擦れ音を発生し、和名「山鳴らし」の由来になった。

作品には、ヤマナラシの別名ハコヤナギの記載もあるが、ヤマナラシ属の外来種(導入種)セイヨウハコヤナギ (*Populus × canadensis* Moench；*Populus nigra* L. var. *italica* Moenchが以前に用いられた)が、ポプラの名称で多くの作品に登場する。欧州原産のこの種は、一般にポプラの名称で広く親しまれ、一時、街路樹、防風林、公共の施設や校庭周囲などに植栽された。

賢治作品に登場したり、羅須地人協会跡地や花巻農学校跡地の公園などの施設に植栽されたりしているウラジロハコヤナギ(別名ギンドロ、ハクヨウ(白楊)；*Populus alba* L.)がある。葉の表面は濃緑色で光沢があり、綿毛が密生する裏面は銀白色に輝き、まさに「閃く」樹冠を呈する導入種である。ポプラと同様、各所に植栽されたり、あるいは、その種子散布によって都市内でも裸地や荒れ地に純林が形成されたりした。

1. 短歌

ヤマナラシの初出は、「大正5年3月より」と

してまとめられた歌群にある。歌稿Aの「風きたり高鳴るものはやまならしあるいはポプラさとのねがひ」中の「あるいはポプラ」が歌稿Bでは「またはこやなぎ」と替えられている。『校友会会報、第32号』(1916年11月発行)に、歌稿Aの句が「灰色の岩」と題された一群の歌群の中にある。この短歌は、賢治が盛岡高等農林学校二年生の新学期、構内実習地(果樹園、馬耕の畑、堆肥、ボルドウ液などの語により判断される)の春の情景を詠んだ歌群の最後に掲げられている。したがって、短歌のポプラは、校地の周辺に列植された個体と推定される。岩手大学教育学部自然教育園の北縁にある8個体のセイヨウハコヤナギ(=ポプラ)の中、6個体は大径木で(須田ほか、1997)、当時の残存個体であろう。ところが、2009年11月の現地調査では、8個体全てが伐採され、長径195 cmと短径170 cmの切り株と、長径150 cmと短径130 cmの切り株が確認された。賢治が詠んだポプラもこの10年間に腐朽が進み、風倒が懸念され処理されたのである。

一連の歌群から判断すると、新学期の実習が始まっているので、ポプラ群には新葉が展開し始めていたと推定されるが、風に「高鳴る」ほどに、葉の成熟が進んでいるかどうかは疑問である。実景のポプラからヤマナラシ属の特徴である葉擦れの音が連想され、その音が春の自由空間(=宇宙)へ伝わる振動であると捉え、その振動へ載せて宗教的な心情が宇宙へ届くと感じたり、そう祈ったりしたのであろう。

歌稿Bの短歌の後に、「風ふきて／ポプラひかればうすあかき／牛の乳房も／おなじくゆれたり」と、ポプラが読み込まれた牧場風景の短歌がある。ここでも、風に吹かれて閃くポプラの特徴が詠まれている。

2. 口語詩と文語詩

『春と修羅』の詩「マサニエロ」に「はこやなぎ」が描かれる。これは、おそらく花巻城址を背景にして、秋の風景の中に展開する植生(植物)や鳥の活動、子供の行動などから受け取った賢治の心

象が、時系列的にスケッチされたものである。はじめに「城のすすきの波の上には／伊太利亜製の空間がある」など、外国の空間をもち込みつつ、終わりに、ヨシの花穂がゆれる堀端らしいところの「はこやなぎ」が詠われる。「はこやなぎ しっかりゆれろゆれろ／（ロシヤだよ ロシヤだよ）」のロシアの景観への連想と、ヨシの立地に近い湿潤な立地から判断して、これもポプラである。

『春と修羅』の詩〔小岩井農場 パート四〕の詩句「本部の気取った建物が／桜やポプラのこっちに立ち」や『春と修羅 補遺』の詩〔旭川〕の詩句「六条にいま曲がれば／お、落葉松 落葉松それから青く顫えるポプルス」、そして、大都市の市街地風景を描いた『東京』の詩〔高架線〕の、5字下げの挿入詩句「きらめくきらめく よろひ窓／行きかひきらめく よろひ窓／ひらめくポプラと 網の窓」には、場所が明示されている。また、『春と修羅』の小都市（花巻か水沢のような地方都市）の郊外風景を切りとった詩〔霧とマッチ〕の詩句「（まちはづれのひのきと青いポプラ）」などもある。

『春と修羅 第二集』の詩〔ほほじろは鼓のかたちにひるがへし〕の集落景観のポプラ（ポプルス楊と記載）が描かれた詩句、「ポプルス楊の幾本が／繊細な葉をめいめいせはしくゆすってゐる／湧くやうにひるがへり／叫ぶやうにつたはり／じつにわれらのねがひをば／いっしんに発信してゐるのだ」の末尾2行の詩句は、「祈り」の短歌に通ずる心象的な内容である。ポプラの繊細な葉の翻りには、「灌漑水の急にそなへたわかものたち」などに明示されるように、賢治を含めて水番をした集落の人々の用水確保への祈念が込められている。ポプラの葉の振動が伝わった大気によって、天候の良好な推移の願いが、神聖な朝の光に満ちた天空に届いたと、賢治は感じているのである。詩篇の樹種はすべて植栽されたポプラである。

作品には、ヤマナラシ属のギンドロも描かれている。葉形は、カエデ類のように辺が凹んだ変形の5角形で、表面の暗緑色と白毛の密生した裏面が、風に翻ると樹冠全体が銀白色に輝く、まさに

「関く」樹木である。賢治が好んだ樹木と伝えられ（森、1988）、花巻農学校の旧校地はぎんどろ公園と名づけられた。

『春と修羅 第二集』の詩〔産業組合青年会〕（1924年10月5日）の校異編に、「銀どろが雲を乱してひるがへるなかに／赤い鬼げしの花を燃し／黒いすもの実をもぎる」の詩句がみられる。本篇の5字下げ詩句「くろく沈んだ並木のはてで／見えるともない遠くの町が／ほんやり赤い火照りをあげる」のような、背景に思い描いた心象風景であろう。そこには、修学旅行復命書の「鬼げし」も表れる。

『春と修羅 第三集』の詩〔もうはたらくな〕（1927年8月20日）の校異篇には、下書稿（一）の「あっちの稲もこっちの稲もみんな倒れた／おれは不安をまぎらすために／こんな雨に働いてゐる」に続けて、「この夜明けの雨が銀ドロの木を屈めたぐらゐ／そんなに強くひどかったのだ」と、集落のギンドロの偏形を風力計に見立てている。賢治が肥料設計と施肥の指導をした稲を、その強風が倒伏させたことは、本篇の終わりの「一人づつぶつつかって／火のついたやうにはげまして行け／どんな手段を用ひても／辨償すると答へてあるけ」から明らかである。ただし、ギンドロは本篇から削除される。

文語詩では、『文語詩五十篇』の詩〔翔けりゆく冬のフェノール〕に、「ポプラとる黒雲の椀」や、『文語詩未定稿』の詩〔恋〕に「草穂のかた雲ひくき／ポプラの群にかこまれて／鐘塔白き秋の館」などがある。とくに、後者は、賢治が若き日に親しんだ鐘塔が立つ教会のような洋風の建物の周囲に植えられたポプラ群を詠った街の景観である。

校異篇のみにみられる詩もある。『文語詩一百篇』の詩〔記念写真〕に「黄葉のポプラを横切」や『文語詩未定稿』の詩〔エレキに魚をとるのみか〕に「一むら立てるはこやなぎ」の詩句があったり、詩〔瘠せて青めるなが頬は〕の下書き稿では、「さてまたポプラの列」を「はこやなぎうちめぐらして」と推敲したりしたが、本篇では削除している。

ここでは、ポプラとハコヤハギ (=ヤマナラシ) の混同も見えるが、賢治の思い出の風景に残存していたのはポプラであったといえよう。

3. 童話

ヤマナラシの登場する童話は『連れて行かれたダアリヤ』である。その描写は、「今度は北風又三郎が、今年はじめで笛のように青ぞらを叫んで過ぎた時、丘のふもとのやまならしの木はせわしくひらめき」や「今は丘のふもとのやまならしの梢のさやぎにまぎれました。」のように、ヤマナラシの立地や葉の特徴が表されている。里山の丘陵地の麓部は、まさにヤマナラシの立地である。一帯に果樹園があったり、ダリアが植えられている農家の庭があったりする典型的な丘陵地麓部の農村の集落景観が描かれている。

『おきなくさ』のポプラは、小岩井農場の草地周囲にある、「閃く」ポプラである。『ボラーノの広場』のポプラは、「並木のポプラ」や「ポプラの中から顔を出している市はずれの白い教会の塔」のように、いわばイーハトヴの都市景観の街路樹や公共施設の植込みとして描かれる。『氷河鼠の毛皮』のポプラも、イーハトヴの吹雪の中で、「風はひっきりなしに電線と枯れたポプラを鳴らし」ている景観要素である。

『銀河鉄道の夜』にも、ジョバンニが住む街の景観、「町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでいる」のように、郊外の施設の外縁に列植されたポプラが描かれる。これもイーハトヴの都市景観といえる。

Ⅲ 白樺の数幹

作品に登場するカバノキ属 (*Betula*) の樹木はやや複雑な構成である。一つは、作品中の「樺」や「樺の木」がシラカンバ (*Betula platyphylla* var. *Sukatchev* (Miq.) *japonica* Hara) とサクラ類 (*Prunus*) に併用されていることである。『牧野日本植物図鑑』(1940)によると、シラカンバの別称の一つとして「カバ」が記され、賢治には樺の呼称が図鑑等に記される和名の一つであると

の認識があった。加えて、秋田県大館地方の樺細工で知られているが、東北の一部ではサクラ類、とくに岩手県の自生種のカスミザクラ (*Prunus verecunda* (Koidz.) Koehne)、オオヤマザクラ (*P. sargentii* Rheder) などが樺細工に広く使用されていたことも、賢治の認識にあったに違いない。しかしながら、樺がシラカンバなのかサクラ類なのか容易に判別される作品と、推定される立地や植生からは、判別できない作品がある。

そこで以下では、①1 作品中に白樺と樺が使用されている場合には樺をシラカンバとする、②シラカンバとサクラ類の判別が難しい場合には樺をシラカンバとする、③樺のサクラ類への特定が容易な作品は、記載と考察から除外した。

他の問題は、生育地、つまり想定される作品の舞台から判断すると、自生種のウダイカンバ (*B. maximowicziana* Regel) やダケカンバ (*B. ermanii* Cham.) に特定される作品があることである。樺や樺の木、さらに後述のシラカンバについての賢治の表記には、種の特定の問題が残るので、今後の検討に資するために、カバノキ属の作品リストを表1に示した。

典型的な陽樹のシラカンバは、北上山地の平庭高原や早坂高原などに、観光資源でもある一斉林の植生景観を形成している。多くのシラカンバは自然林が破壊された林野火災跡地、放棄された放牧地や草地に群落をつくる。岩手出身の歌手が歌った流行歌「北国の春」の大ヒットにより、シラカンバは岩手県を代表的する樹木となっているが、作詞の井出博正によると自身の故郷信州の情景である高原と白樺林をイメージしたとされる(岡、2009)。中部地方から北海道まで自生するシラカンバは、宮城県には分布せず(宮城植物の会・宮城県植物誌編集委員会、2001)、岩手県でも、北上山地の早池峰山以北、奥羽山系の岩手山以北に分布する(菅原編著、1993)。

このような立地や分布の特徴が賢治の作品にも表れ、岩手山麓や北上山地中北部を示唆する地域が多くの作品の舞台となっている。

表1 カバノキ属の作品一覧（樺欄には「樺」と「樺の木」が含まれる）

区分	タイトル・該当句（短歌）	詩篇名、出版書名等	表記名		特定種	備考（特定理由等）
			白樺	樺		
短歌	白樺の老樹	歌稿A	●		シラカンバ	幻覚、シラカンバの老樹は稀
短歌	白樺となり	歌稿B	●		シラカンバ	いのり
短歌	白樺の	歌稿B	●		シラカンバ	皮剥
短歌	象牙細工の白樺は	歌稿B	●		シラカンバ	黄葉
短歌	白樺に	歌稿B	●		シラカンバ	かなしみの投影、祖父の死
短歌	樺もゆる	アザリA2号		●	シラカンバ	スズラン、サクラ類可
口詩	小岩井農場	春と修羅	●		シラカンバ	好摩から向こう、姫神山北麓か
口詩	高級の霧	春と修羅	●		シラカンバ	牧場景観
口詩	滝沢野	春と修羅		●	シラカンバ	林の入り口、林縁、サクラ類可
口詩	栗鼠と色鉛筆	春と修羅		●	ソメイヨシノ	軽便沿線、街の植栽樹
口詩	白い鳥	春と修羅			シラカンバ	オキナグサ、牧場、馬立場、サクラ類可
口詩	樺太鉄道	春と修羅	●	●	シラカンバ	聖白樺、林野火災跡地の一斉林
口詩	鈴谷平原	春と修羅	●		シラカンバ	好摩への連想
口詩	噴火湾（ノクターン）	春と修羅		●	シラカンバ	北海道の植生
口詩	鎗岩流	春と修羅	●		シラカンバ	草原景観、白樺の葉
口詩	丘陵地を過ぎる	春と修羅 第二集	●		シラカンバ	装景樹3種
口詩	北上山地の春	春と修羅 第二集	●		シラカンバ	カンデラブル
口詩	峠	春と修羅 第二集	●		ダケカンバ	偏形樹、ねじれた枝、ダケカンバ帯、
口詩	種馬検査日	春と修羅 第二集補遺	●		シラカンバ	カンデラブル
口詩	エレキの雲が…	詩ノート	●		シラカンバ	岩手山麓
口詩	峠上で雨雲に云ふ	詩ノート	●		シラカンバ	ダケカンバ、「峠」と同じ自然環境
口詩	もう二三ベン	口語詩篇		●	ソメイヨシノ	黄葉、紅葉、集落景観、エドヒガン可
口詩	牧馬地方の春の歌	補遺詩篇I	●		シラカンバ	日に燃える、牧馬地方
口詩	三原第二部	三原三部		●	オオシマザクラ	オオシマザクラの分布、装景
口詩	樺と櫛の林のなかに	補遺詩篇II		●	カスミザクラ	コナラとの混生
口詩	雲影滑れる山のこなた	補遺詩篇II		●	シラカンバ	シラカンバの植栽林
口詩	梢あちこち繁くして	補遺詩篇II		●	ソメイヨシノ	天狗巣をヤドリギと間違った内容
口詩	孤独と風童	生前発表詩篇		●	シラカンバ	樺の林、サクラ類の森林はない
文詩	柳沢	文語詩五十篇		●	シラカンバ	〔その時酒代つくと〕の校異篇、樹皮利用
文詩	遠く琥珀のいろなして	文語詩校一百篇	●		シラカンバ	校異篇に白樺
文詩	秘境	文語詩未定稿		●	シラカンバ	カシワ林と同所的環境
文詩	製炭小屋	文語詩未定稿		●	シラカンバ	カシワ林と同所的環境、校異篇
童話	貝の火			●	カスミザクラ	白い花、放牧地周囲の二次林
童話	十力の金剛石		●	●	シラカンバ	白樺の単純な言い換え
童話	風野又三郎		●	●	シラカンバ	垂直分布、ダケカンバ、自生サクラ類
童話	イーハトーボ農学校			●	ソメイヨシノ	ボブラとサクラの植栽（記録あり）
童話	谷		●		シラカンバ	カシワ、ナラの林と
童話	化物丁場			●	カスミザクラ	栗の木、樺の木、黄葉のコナラ林
童話	黄いろのトマト			●	カスミザクラ	樺の木と楊の木、里山の雑木林
童話	土神ときつね			●	オオヤマザクラ	黒い幹のオオヤマザクラと白花のカスミザクラの合成か、1年草エノコログサ？
童話	みじかい木ベン			●	シラカンバ	樺、樺の木、樺の林の表現、林を形成
童話	台川			●	カスミザクラ	「小桜山だろ」からの連想、里山
童話	タネりはたしか		●		シラカンバ	白樺樹皮利用、灯り、松明等（部分）
童話	黒ぶどう			●	シラカンバ	樺の林、シラカンバ林
童話	ボランの広場		●		シラカンバ	白樺の樹皮利用、代用紙（部分）
童話	或る農学生		●		シラカンバ	北海道の植生
童話	なめとこ山の熊			●	ウダイカンバ	谷底に近い斜面下部、奥羽山系ブナ林
童話	ボラーノの広場			●	エドヒガン	地図記号の読図、独立樹（現在の保存木）
童話	かしはばやしの夜	注文の多い料理店	●		シラカンバ	カシワ林と同所的環境、岩手山麓
童話	やまなし			●	カスミザクラ	樺の花、白いはなびら（部分）
童話	グスコブドリ		●	●	シラカンバ	樺の枝はカスミザクラ可
童話	柳沢		●		シラカンバ	岩手山麓
童話	劇 種山ヶ原の夜			●	カスミザクラ	樺樹霊、薪炭林払い下げがサブテーマ
童話	蒼冷と純黒		●		シラカンバ	外山高原へ移住をめぐる会話

1. 短歌

1914年4月から、賢治は鼻の治療の入院療養中に長期間の発熱に見舞われる。歌稿Aの「白樺の老樹の上に眉白きおきな住みつゝ熱しりぞきぬ」は、発熱時の幻覚か、幻想を詠ったもので、実景の中のシラカンバではない。

盛岡高等農林学校入学後の「大正5年3月より」の歌群には、歌稿AとBとも同じ、「われもまた／白樺となりねぢれたるうでをささげて／ひたいのらん」（歌稿AとBが同じ短歌である場合の表記はBを引用した。以下同じ）がある。この短歌の前後から類推すると、岩手山麓で詠んだものである。この短歌の前には、「赤き雲／いのりのなかにわき立ちて／みねをはるかにのほり行きしか」が、後に、「でこぼこの／溶岩流にこしかけて／かなしきことを／うちいのるかな」があって、3首とも「祈り」の表現がみられる。

さらに、同じ括りの短歌群に、「白樺の／かゞやく幹を剥ぎしかば／みどりの傷はうるほひ出でぬ」と、表皮を剥いだ幹の鮮やかな緑（実際には黄褐を帯びた緑色であるが）を心象的に表現している。この後に、「風は樹をゆすりて云ひぬ「波羅羯諦」あかきはみだれしけしの一むら」があり、宗教的な雰囲気をも描いている。したがって、これら一連の短歌には、賢治にとってのシラカンバの聖性あるいは宗教性といったものが認められる。

同じ年の「大正5年10月より」の歌群には、歌稿A、Bとも、「黄葉落ちて／象牙細工の白樺は／まひるの月をいたゞけるかな」と、シラカンバを特徴づける黄葉が散った後に一層目立つ、白く平滑な樹肌の幹を、象牙細工に喩える。

翌1917年7月に、「祖父の死」のタイトルにまとめられた歌群の中には、歌稿A、Bとも同じ、「白樺に／かなしきは湧きうつり行く／つめたき風のシグナルばしら」とあって、夏のシラカンバに、自らのかなしみを投影している。

1917年7月18日発刊の同人誌アザリア第2号の「夜のそらにふとあらわれて」と題された歌群の中に、「樺もゆるあかき火なればすゝらんはふるひ、ひかり、な小青々と冴ゆ」と「樺」の登場

である。スズランや陽光の中に萌えだした若葉などから、立地環境を放牧地の中の被陰樹（牛馬の日射し除け、馬立て場）か、周囲の主として薪炭林として利用された森林（二次林ともいう）の林縁とみて、この樺はシラカンバである。

2. 口語詩

岩手山周辺を詠った『春と修羅』の詩「滝沢野」の「暗い林の入り口にひとりただずむものは／四角な若い樺の木で／Green Dwarf という品種／日光のために燃え尽きさうになりながら／もえきらず青くけむるその木」の「樺の木」は、詩句のカラマツやカシワに絡む烏瓜（分布からキカラスウリ）ランタンなどや、「暗い林の入り口」、つまり林縁にあることからシラカンバが特定される。しかしながら、「Green Dwarfという品種」、「四角な」の樹形、「つくり（剪定等）」の詩句は、サクラ類を暗示している。日本には、サクラ類の品種をつくった古い歴史があり、矮性のマメザクラなどの園芸品種を賢治が知っていたとも考えられ、その植栽を見たのかも知れない。

無声慟哭シリーズの詩「白い鳥」の「樺の木」は、「古風なくらかけやまのした／おきなぐさの冠毛がそよぎ／鮮やかな青い樺の木のしたに／何匹かあつまる茶いろの馬／じつにすてきに光つてゐる」から、明らかに馬立て場の風景描写であり、シラカンバが相応しい。岩手山東麓の放牧草地の景観である。

賢治の生前に唯一発刊された詩集『春と修羅』にシラカンバが登場するのは、詩「鎔岩流」や詩「樺太鉄道」などである。初冬の焼け走り鎔岩流に近い岩手山北東麓の草地景観を詠った「鎔岩流」の詩句、「雪を越えてきたつめたい風はみねから吹き／野はらの白樺の葉は紅や金やせわしくゆすれ」は、吹き出した季節風に残り少ない黄葉がゆれ、樹冠を通した陽光の斑が、紅や金色に輝いた風景描写である。

詩「樺太鉄道」は、文学活動の開始時に賢治が受け取ったシラカンバの「聖性」や「宗教性」が表出されている。詩句「Van't Hoffの雲の白髪

崇高さ／崖に並ぶものは聖白樺（セントベチュアルバとルビ）」のVan't Hoffは、第1回ノーベル化学賞を受けたオランダの化学者で、溶液の浸透圧などを発見した。おそらく、過去に観察した溶液中の白髪のような発現現象を白雲の輝きに見て、それが賢治には崇高に感じられ、その白雲の前景にシラカンバの列が映えていたのであろう。夕陽の逆光の中では、シラカンバの葉が「その緑金の草の葉に／ごく精巧ないちいちの葉脈／（樺の微動のうつくしき）」とヤマナラシのようにわずかにふるえていた。

賢治の思考は、シラカンバ林の起源と宗教的な世界に及び、2字下げの詩句「（こゝいらの樺の木は／焼けた野原から生えたので／みんな大乘風の考えをもつてゐる）」と、シラカンバ林が山火事跡地の一斉林であり、それが、一度焼き尽くされ清浄になった時空に、生命が復活再生するといった宗教的なプロセスを象徴しているのであろう。ここには、林野火災跡地の指標植物であるヤナギランも描かれている。

『春と修羅 第二集』の北上山地を詠った詩「北上山地の春」の「雪沓とジュートの脚絆／白樺は焰をあげて／熱く酸っぱい樹液を噴けば」は、早春の、シラカンバがかすかに甘い樹液を循環させる活動開始を象徴的に描く。校異篇の詩句「自然にカンデラブルになった白樺」は、樹形が果樹の剪定形である「カンデラブル」の形態だと記されるが、この樹形は、北上山地の各地から集まる馬市の風景要素を詠った日付のない『春と修羅 第二集補遺』の詩「種馬検査日」の「カンデラブルのかたちした／白樺の木をとめくる水に／かげらふも燃え湯気も燃え」となって再現されている。

『詩ノート』の詩「エレキの雲がばしゃばしゃ飛んで」には、先端枯れのスギがあり、「こんもりと新芽をふいた白樺の下に／一つの古いそりが置きすてられ」ている岩手山麓の集落近くのシラカンバである。

3. 文語詩

短歌や口語詩の創作を経て到達した賢治の文語

詩は、その過去の作品が素材となり、推敲を重ねてつくられている。『文語詩一百篇』の詩「遠く琥珀のいろなして」の本篇には、「峯には青き雪けむり、裾は柏の赤ばやし」と、冬枯れの景観にシラカンバはないが、その校異篇には「白樺のたてるこの原の／偏光のなかをながれたる」と、早春の点描として、草原の中に立つシラカンバの木立を想起している。「柏林」ではあるが「白樺林」ではないのである。冬枯れのカシワ、草原のシラカンバ、あやしき沼などの語句は、柳沢から沼森付近の景観を推定させるが、現地に臨んでの詠唱ではない。

中学生の頃に友人と行ったキノコ狩りの情景を詠った『文語詩未定稿』の詩「秘境」の詩句「樺柏に囲まれて／ほうきだけことうち群れぬ」には、カシワとシラカンバの混交林下の「ほうきもだし」が描かれる。遠景に「峯の火口に風鳴りぬ」とあるから、岩手山麓であろう。樹皮に厚いコルク層をもつカシワは、火入れ時の火焰や高温に対して高い抵抗性を示し（三浦、2006b）、先述の火災跡地に再生するシラカンバとの混交林は、明らかに火入れ地に再生した植生である。

『文語詩未定稿』の本篇にはないが、校異篇に「樺」が記された詩「製炭小屋」に、「とろとろと赤き火を燃し／まろなる樺や柏に／眼瞳赤くうち仰ぎつゝ」があり、シラカンバとカシワの林に囲まれた炭焼き小屋が描かれる。賢治には、シラカンバとカシワの混交林の景観がしっかりと記憶された植生の一つであった。また、『文語詩五十篇』の詩「そのとき酒代つくと」の本篇には、「柏原とゝろきて、さはしぎら遠くよばひき。」とシラカンバはないが、校異篇の下書稿詩「柳沢」の「樺の火」や「たいまつ にうらん 樺をいぶせば」などの詩句は、シラカンバの樹皮が、松明や火付け木として用いられたことをも、賢治は知っていたことがわかる。

4. 童話

表紙に村童スケッチとある『谷』は、舞茸（マイタケ）の名称由来の俚言でよく知られているよ

うに、親族にも秘密とされるキノコの発生場所をめぐる物語である。私（賢治らしい）が馬番理助にだまされ、その翌年友人藤原慶次郎とリベンジのキノコ狩りをする。舞台は里山である。そこに、子どもが恐怖を抱くような深い谷が描写される。「谷底には水もなんにもなくてたゞ青い梢と白樺などの幹が短く見えるだけでした。」と、谷底のシラカンバの樹幹がみられる。また、秘密の生育地が「柏や檜の林の中の小さな空地」であったことも記され、ここに、『文語詩未定稿』の詩〔秘境〕の詩句「樺柏に囲まれて／ほうきだけことうち群れぬ」の原風景があったのである。ただし、私が「野原でたった一人野葡萄を喰べてゐ」た記述は間違いで、ノブドウは食に適さない。これらの舞台は、盛岡西部の南昌山や毒ヶ森などの里山である。

岩手山麓を舞台とする『かしはばやしの夜』の「白樺の幹などもなにか粉を噴いている」や『柳沢』の「黄葉をふるはす白樺の木」の描写は、薄暗がりに目立つ白い樹幹や秋の黄葉などシラカンバの特徴そのものである。

賢治の童話で唯一奥羽山系のブナ林を舞台とした猟師小十郎とツキノワグマの命の遣り取りを描いた『なめとこ山の熊』にも「樺」が登場する。その描写は、「小十郎は自分と犬との影法師がちらちら光り樺の幹の影といっしょに雪にかっさり藍いろの影になってうごくのを見ながら溯って行った。」とあり、樺は谷底に近い斜面にある。奥羽山系の自生地が岩手山から北のシラカンバは、この物語の舞台である豊沢川流域には自生しない（菅原編著、1993）。和賀川上流域の沢内盆地の西を限る和賀山系にはダケカンバとウダイカンバが分布する（大場、1999）。ブナ林の谷底に近い谷壁下部の立地を重視すればウダイカンバに特定される。

『グスコブドリの伝記』では、北上山地北部（全体の舞台はいわゆるイーハトヴ）と推定される山村の樵夫一家が暮らす環境に、「ホップの蔓が、両方からのびて、門のようになっている白樺の樹には、「カッコウドリ、トオルベカラズ」と書いたりもしました。」と森林に通ずる林道の入り口

の林縁にシラカンバが立っている。しかもそこに、林縁のマント群落を構成するツル植物のホップ（＝カラハナソウ）を添えるなど、賢治の植生を観察する眼力が垣間見える。森林の縁辺（例えば草地に接しているところ）では、ツル植物や低木性の樹種などでつくられた群落が、森林内への乾燥大気の吹き込みを防いでいる。これがマント群落である。

しかしながらその賢治が、「てぐす飼いの男」がブドリの父を埋葬した森の中の土饅頭の目印を「一本の樺の枝」と記すことに、読者は混乱するのである。父が死の場に選んだ植生には、鬱蒼とした森林内部が相応しいが、シラカンバの門という印象的なシーンを受け取れば、この枝はシラカンバである。

仔牛と狐が家宅侵入する『黒ぶだう』の「樺林」はシラカンバ林である。その中に建つ洋館は「ベチュラ公爵の別荘」である。「ベチュラ」は、詩「樺太鉄道」の「聖白樺」のルビ「セントベチュラルバ」と同じシラカンバの属名*Betula*からの発想である。作品には、しばしばこのような学名に関連づけた、いわば言葉遊びといえる用語や用法が登場する。樺林の中の別荘が鉄の垣（フェンス）で囲まれていたり、ヒイラギの植込があったり、当時の洋風建築の雰囲気を出す、賢治の演出をも読みとることができる。舞台は、都市郊外の明るい草地とシラカンバ林が展開するイーハトヴの景観である。

わずかの草稿のみが残された芝居の台本らしい『蒼冷と純黒』には、神のみ名によるエゴイストで、快楽主義者を自称する〈蒼冷〉が〈純黒〉に、「外山と云ふ高原」の一面、つまり北上山地で、独り開墾をしたいと云う。それに対して里人の暮らしに思いが残る〈純黒〉は「此处から行かないで呉れ」と云う。その〈純黒〉の科白に、「白樺の薄皮が、隣りの牧夫によって戯れに剥がれた時、君はその緑色の冷たい韃靼皮の上に、縋帯をしてやるだらう。あゝ俺は行きたいんだぞ。君と一緒にいきたいんだぞ。」が現れる。これには、短歌の「白樺の／かゞやく幹を剥ぎしかば／みどりの傷はうるほひ出で

ぬ」で得た、シラカンバへの賢治の親和性あるいは宗教的聖性がより明確に表出されている。

王子と大臣の子どもが、虹の脚部にあるといわれる宝石を探しに森へ行く、神聖で宗教的な物語の『十力の金剛石』には、「白樺の木」や「白樺のみき」と「樺の木」が登場するが、両者の違いは見つけられない。白樺が中程で樺に変わり、再度白樺になっているので、単なる言い替えであろう。ただし、「樺の木」をサクラ類に特定しても、植生的な矛盾はない。地域のモデルも推定できない架空の舞台が設定される。

「白樺」や「樺」には、樹木それ自体ではなく、植物体の部分が描かれた童話がある。『タネリはたしかにいちにち噛んでゐたやうだ』では、タネリが母親から「森へは、はいて行くんでないぞ。ながねの下で、白樺の皮、剥いで来よ。」と言われる。森へは入るなという母の注意は、林内環境には白樺が生育しないこと、あるいは鬱蒼とした森林への畏怖があったことの二つの意味を暗示していよう。また、タネリの居住環境に好適な低地（谷底か盆地底）に張り出した、崩壊物質が堆積する尾根（長嶺）の下部など、相対的に不安定な立地にシラカンバが生育する。このような、賢治の植生観察の的確さを読みとることもできる。賢治の知識は、樹皮が付木や明かり（華燭の起源；辻井、1995）になったことにも及んでいたに違いない。さらに、「小屋の前で、こならの実を搗き」は、当時の岩手で、とくに山村で広く行われていたナラ類の堅果食を表している。

樹皮の他の利用法は、『ボランの広場』に現れる。カシワ林の中のファリーズ小学校では、枯れ草を入れた木沓を履いたり、ノートの代わりにシラカンバの皮を机の上にひろげて置いたりするような子どもが通学する。このシラカンバの樹皮はいわば代用紙である。深津・小林（1993）によると、ダケカンバの別称ソウシカンバは、樹皮に文字を記す「草紙樺」の意であるというが、賢治はこの種名を取り上げていない。ところが、代用紙としての利用法が賢治の知識にあったことを、物語の描写は明示している。

樺の使用例として、植物そのものではなく、地形図記号の読図に関わった例が、『ボラーノの広場』にみられる。ムラードの森での「ああ、これかしら、何の木だい、樺か樺だろう。唐檜やサイプレスではないね。」は、地形図記号の判読をめぐっての会話である。樺はコナラであるが、樺はおそらくサクラ類であろう。広葉樹林か針葉樹林かの植生型の判定ではなく、工場のある場所を読みとるのが目的のようである。当時の5万の1地形図にも、広葉樹林や針葉樹林などの植生区分の外にも、独立樹のカテゴリーがある。工場のある場所を探しているので、広葉樹の独立樹である。古木が少ないシラカンバでなく、植栽の歴史の古いエドヒガン（*Prunus pendula* Maxim. f. *ascendens* (Makino) Ohwi）が似つかわしい。岩手県緑化推進委員会巨樹・名木等調査部会編（2001）のリストにも、エドヒガンなどのサクラ類は多数みられるが、シラカンバは1件もない。ほかにも、ボラーノの広場へ通ずる場所にある「二本の樺の木」は、イーハトヴの都市郊外とするとサクラ類である。

ボラーノの広場を囲む植生は、「黒い藪も風に鳴りたびたび柏の木か樺の木かがまっ黒にそらに立ってざわざわざわざわゆれているのです。」と、藪の中の樹種の判別は黒い樹形からは分らないと記す。ところが賢治の描写は周到で、小型の葉の「サワサワ」でなく、中型の葉の「ザワザワ」であって、「樺」のサクラ類への特定材料が埋め込まれているのである。ただし、葉ずれの音からは、より大型の葉のカシワと区別がつかないのである。

次章で扱う唐檜については、「何の木だい、樺か樺だろう。唐檜やサイプレスではないね。」と地形図記号の針葉樹の例示である。仮に、物語舞台（ムラードの森）が、岩手（イーハトヴ）だとすると、針葉樹の代表（優占種か、自生種か）は、トウヒやイトスギではない。賢治のイメージは街の庭園などに植えられたドイツトウヒであろう。イトスギは、日本に自生しない種で、賢治の「サイプレス」は、ヒノキをイトスギ（典型はゴッホの絵画からの連想？）に見立てたものである。し

かも、ヒノキは、盛岡高等農林学校の自啓寮から見た、現在の岩手大学農学部植物園（賢治在学中の林木園）に現存するヒノキ個体で、岩手県の自生種はサワラ（目時のサワラが構内に現存）である（三浦、2005）。サイプレスは、二重の間違ひのもとに見立てられている。

5. 峠の「白樺」はダケカンバか

『春と修羅 第二集』の詩「峠」の詩句「冷たい風が、／せはしく西から襲うので／白樺はみな、／ねぢれた枝を東のそらの海の光へ伸ばし」は、落葉期のために目立った幹や枝の歪みが捉えられている。「釜石湾の一つぶ華奢なエメラルド」や「鉄鉋床のダイナマイト」などの詩句から、北上山地仙人峠の冬期季節風の偏形樹景観であろう。「峠」と同じような設定の詩が、『詩ノート』の1927年の「峠の上で雨雲に云う」である。詩句「そのまがりくねった白樺の枝」のシラカンバは、北上山地の五葉山を望む鞍部の偏形樹である。風が収斂し風速が増す峠は、偏形樹形成の条件下にある。この峠（仙人峠）付近の偏形樹の気候景観（岡、2000）は、賢治に強い印象を与えたい。

賢治の作品にダケカンバ（岳樺）は出現しない。仙人峠は、釜石側の大橋鉋山の標高260 mから一気に標高920 mまで上がる難所で、標高1000 mほどの尾根が南北に連なり、高度的にダケカンバの生育地となる。『日本植生誌 東北』（宮脇昭編著、1987）の現存植生図によると、仙人峠の北の雄岳（1313 m）や北西の六角牛山（1294 m）と大峰山（1147 m）から連なる尾根にネコシデ-ダケカンバ群落が見られる。この群落は亜高山帯の二次林、つまり、人為作用によって自然林が破壊された立地に成立した森林で、おそらく放棄放牧地に成立した植生である（大住、2005）。相対的に短命で真っ直ぐに伸びるシラカンバの幹枝より、長期間風雪に曝されて屈曲したダケカンバの幹枝が、偏形樹の景観として適切であろう。

IV 正形の独乙唐檜（外国産の針葉樹）

岩手県の自生種であるヤマナラシとシラカンバ

より登載作品が少ないドイツトウヒ（別称ヨーロッパトウヒ；*Picea abies* (L.) H. Karst.）は、明治中期に導入されたトウヒ属（*Picea*）の樹木で、はじめは北海道の鉄道防雪林に、その後耕地防風林や各地の公共施設に植えられた（辻井、2006）。前述の2属の種と同様、賢治作品には、「唐檜（トウヒ；*Picea jezoensis* var. *hondoensis* (Myr) Rehder）」も記され、同一作品中に「獨乙唐檜」と混用されている。トウヒは岩手県に自生しない。

1. 短歌と詩

トウヒ類の初出は、盛岡高等農林学校三年の「大正6年4月」にある短歌で、歌稿A、Bとも同じ「わがうるはしき／ドイツたうひよ／（かゞやきの／そらに鳴る風なれにも来り）」である。この異稿のような内容の短歌「わがうるはしき／ドイツたうひよ／とり行きて／ケンタウル祭の聖木とせん」が、歌稿Bのみにある。

『銀河鉄道の夜』に現れるケンタウル祭も、その祭のシンボルらしい聖木も、その意味する内容、言い換えれば、象徴するものが何であるか、この短歌からは容易に理解できない。確かに、ドイツトウヒがクリスマスツリーにもっぱら用いられる樹木であること、したがって、聖なる木であることは、後の作品から分かる。ドイツトウヒの歌が詠まれた1917年4月は、弟清六や従兄弟達と、盛岡市の玉井方に下宿したり、最終学年三年生の新学期が始まったり、学年の級長に選出されたり、賢治にとって生活環境に顕著な変化があった時期である。

短歌のドイツトウヒは、4月上旬、盛岡では冬の名残がそこそこに見られる早春の景観にあったことが分かる。当時の盛岡高等農林学校の構内に、ドイツトウヒがあったことは確実である。その後の植栽も含めて、岩手大学農学部植物園と教育学部自然教育園（賢治在学中の植物園）、それに農業教育資料館（賢治在学中の本館）周辺などに成長した個体が生育している（写真1）。

「わがうるはしき」を考察する際に、『修学旅行



写真1 岩手大学構内のドイツトウヒ（2009年2月）
左奥に農業教育資料館の付属館（旧盛岡高等農林学校本館）、手前は北水の池

復命書』に記された独乙唐檜に付された形容句「正形の」は示唆的である。盛岡高等農林学校は1903年5月に1期生が入学し、1905年4月に植物園が設置されている。この頃から構内や植物園の植樹が行われたとして、1915年入学の賢治が詠ったドイツトウヒの樹齢は10数年の若木に違いない。ドイツトウヒの若木（樹高5m以下）の樹形はほぼ正三角錐で、成長すると下部が円筒形に近く、上部のみが長い三角錐になる。しかも、主幹から放射状に伸びる主枝から羽状に出る枝は下垂し、樹冠全体が垂れ下がった印象を受ける。作品には、この種の特徴である、下向きに着く大きな毬果が全く描かれていない。とすると、賢治の捉えたドイツトウヒは、性的成熟に達しない個体であったと考えられる。まさに、賢治の青春や若さの象徴であったのである。

『春と修羅 第三集』の詩「一昨年四月来たときは」の本篇の詩句「新におこした塊りには／いちいち黒い影を添へ／杉の林のなかからは／房毛まっ白な聖重挽馬が／こっそりはたけに下り立って」にドイツトウヒはなく、校異篇の「いちいち黒い影を添へ／獨乙唐檜の四年の苗も三列芽えて／杉の林のなかからは／まっ白な聖輓馬が」にある。スギ林から輓馬が出てくる耕起した土塊の影が映える畑地には、4年生のドイツトウヒ苗が植えられている。耕地防風林の造成のようである。さらに、『詩ノート』の詩「根を截り」の詩句「土

の塊りはいちいちに影／三れつ青らむクリスマスツリーと／青ぞらひかれは／聖重輓馬が／いつかこっそり／うしろのはたけに立ってゐる」は、まったく同じ設定である。これら3篇は1927年4月1日の日付が付されている。

この日付よりやや遅れた1927年4月7日が付され、この設定の一部をアレンジしたような詩「いま撥ねかへるつちくれの蔭」が、『詩ノート』に登載されている。関連する詩句は、「いま撥ねかへるつちくれの蔭／古びて緑な陶器の蛙／その蛙またはねかへり（中略）こんどは 四五日たつて／唐檜をこゝに植えるのだ／そのときまでに／眼をさまして外へ出てろよ」である。

これらが一連の詩作プロセスであったとすると、春の農作業開始によって耕起された畑地へドイツトウヒを植える耕地防風林の景観が復元される。時系列的には、「いま撥ねかへるつちくれの蔭」の唐檜の植栽案が最初であって、植栽された3列のクリスマスツリーの景観がつくられ、クリスマスツリーが獨乙唐檜であるというプロセスであろう。しかしながら、理由は明らかにされないが、耕地防風林景観は本篇で削除された。ここで明らかにされるのは、ドイツトウヒについての賢治の認識は、短歌の聖木の象徴がクリスマスツリーからのイメージであること、唐檜とは区別されないことである。むろん、下枝が長く残存する性質が防風林の適樹であることは、賢治の知識にあったのである（写真1参照）

2. 童話

『よく利く薬とえらい薬』の「森の中」にある「小さな円い緑の草原」は、「まっ黒なかやの木や唐檜に囲まれ、その木の脚もとには野ばらが一杯に茂って、丁度草原にへりを取ったよう」である。このような森林の中に形成された草地の景観は、『どんぐりと山猫』のカヤの林の中の草原や『山男の四月』のヒノキ林中の草原などにもある類型表現である。カヤやヒノキが優占する森林は、岩手県にはない。「唐檜」をトウヒとすると、分布は福島県以南の高標高地である。カヤの自然分布

は宮城県以南の主として丘陵地であり、岩手県の個体はすべて植栽である。したがって、カヤとトウヒの森林は、あり得ない組み合わせである。賢治がトウヒと同じ樹木として扱ったドイツトウヒにしても、スギ林やアカマツ林のような人工林の景観はない。

一方、刺のあるノイバラの優占する低木群落が、典型的な林縁のマント群落であったり、営実（エイヅツ）と呼ばれた果実が、寫下薬、利尿薬の民間薬として利用されたり、植生景観や薬の物語の小道具などとしての賢治の描写は的確なのである。

当時のドイツトウヒがどのような使われ方をしたのかわかる作品が『チュウリップの幻術』である。「独逸唐檜（ドイツたうひとルビ）」と「唐檜」が混用される本篇の初期形の『研師と園丁』では、植生景観は変わらず唐檜のみの記載である。独逸唐檜の使用頻度が高いのが本篇であることから、本篇の唐檜は、単純な推敲ミスであろう。

園丁室と洋傘直し（＝研ぎ師）の作業スペースとの間には、ドイツトウヒの茂みがある。園丁が出入り可能な密度のまだ若い個体群である。舞台のモデルは、ドイツトウヒの初出の短歌が詠まれた盛岡高等農林学校の構内、とくに、以下の状況証拠から、植物園と推定される。

盛岡高等農林学校も現在の岩手大学も、北上川の段丘面と下台と呼ばれる氾濫原に諸施設がある。氾濫原には、当時、樹木園、果樹園、桑園、それに植物園などがあった。その植物園を引き継いだ現在の教育学部自然教育園に、ドイツトウヒの大径木がある（須田ほか、1997）。当時の「茂み」を推定させる比較のまとまったドイツトウヒは、自然教育園の西縁部にある。現在の個体群の測定によると、DBH（胸高直径）が65 cm～40 cmで、樹高が16 m～18 mであった。

賢治に連れられてたびたび植物園を訪ねた森（1988）によれば、植物園の園丁の詰所は、園の入り口に近いところにあったらしい。また、国立大学の附属施設である植物園や農園の技術職が近年まで園丁と呼ばれていた。

『氷河鼠の毛皮』の「唐檜」も誤用である。舞

台が北海道からサハリンやシベリアだとすると、トウヒではなくエゾマツ（*Picea. Jezoensis* (Sieb. et Zcc.) Carrière）である。詩「オホーツク挽歌」では、「とゞ松やえぞ松の荒さんだ幹や枝が／ごちやごちや漂ひ置かれたその向ふで」と詠い、海岸に打ち上げられたエゾマツとトドマツ（*Abies sachalinensis* (Fr. Schm.) Masters）が明示され、賢治は正確な種名と分布を認識していた。しかし、賢治はトウヒと記す。

『銀河鉄道の夜』の「唐檜」は「そこにはクリスマストリイのようにまっ青な唐檜かもみの木がたって」と記され、初期形からこの表現に変化はない。モミ類（*Abies*）やトウヒ類（*Picea*）の両種が、クリスマスツリーに広く用いられていることを賢治は承知していたのである。

V 「風野又三郎」と「白樺と好摩」にみる 賢治の植生学

1. ヤマナラシとシラカンバ

風の神の子又三郎が主人公の童話『風野又三郎』では、山村の子どもがつくった烏瓜の燈籠を吹き飛ばした又三郎が、その償いに5本の「はこやなぎ」の木をもってくと約束する。「やまならし」と表現しても差し支えないのに、別称にした理由は考えられるであろうか。短歌の項でみたように、「やまならし」と「はこやなぎ」そして「ポプラ」への名称の変換の理屈などは、賢治には考慮外なのである。

又三郎の弁済物が何故「はこやなぎの木」なのであろうか。風の子（＝風神）が風に閃く「はこやなぎ（ヤマナラシ）」を、その自生の生育環境である山村に、わざわざ持参することは合理的といえない。しかしながら、集落景観の改造手段としてポプラの植栽構想を、賢治がもっていたとすれば、山村にこそハイカラの象徴として外国産のポプラの苗木をプレゼントすることが、似つかわしかったのである。もっぱら挿し木による苗木の生産が容易で、しかも岩手県において、植栽樹やパルプ用材としての品種改良も行われてきたポプ

ラ（八重樫、1999）は、賢治の表現に従えば、まさに「植栽木の標本」であった。

この童話の「白樺」と「樺の木」には、植生学的な問題がある。又三郎の科白「谷底はいいねえ。僕は三本の白樺の木のかけへはいってじっとしずかにしていたんだ。」の白樺は、岩手山の3合目（麓部）の谷底にある3本のシラカンバとしても矛盾はない。このシラカンバの立地を「それは僕の前にもっ黒な崖があつてねえ、そこから一晩中ころかさかさ石かけや火山灰のかたまつたのやが崩れて落ちて来るんだ。」と記述されることは、崩壊が頻発する斜面下部の岩屑や火山灰の塊の堆積する崖錐に対応する。この環境はまさにシラカンバの立地である。

一晩休んだ翌朝に未だ暗い谷底から見上げた崖の上（登山道か）に、光に透かした「檜の木」や「樺の木」が「火にすかし出されてまるで烏瓜の燈籠のように」見える。岩手山のブナ帯（山地帯）は、下部のミズナラ林帯と上部のブナ林帯に区分され（岩手植物の会編、1995）、この檜の木はミズナラに特定される。樺の木は、直前の記述の「三本の白樺の木」からシラカンバに特定されるであろうか。この檜と樺の2種の生育地は安定斜面である。とすると、樺の木はミズナラと混交するカスミザクラ、あるいはオオヤマザクラである。

終末に表れる村童の耕一が「路の一とこに崖からからだをつき出すようにした檜や樺の木が路に被さったとこ」の下を通った時、「俄かに木がぐらっとゆれてつめたい雫」が、耕一の肩に落ちてた」の樺は、里山の村道の切り通しであるから、カスミザクラに特定される。

2. 岩手山の植生帯

「すぐ下にはお苗代や御釜火口湖がまっ蒼に光って白樺の林の中に見えるんだ。」の「白樺の林」は、明らかに間違いである。活動の時期が異なる岩手山の植生の垂直分布帯は、活動の古い西から新しい東へ連なる山体の方位によって異なる。賢治の頻繁に利用した柳沢登山道の垂直分布帯は、標高750 m（以下同じ）までがカラマツなどの人

工林、1100 mまでがミズナラ林、1500 mまでがダケカンバ林、1700 mまでがミヤマハンノキ林、その上方に火山荒原植生が配列する（岩手植物の会編、1995）。主峰の西側の大爆裂火口（カルデラ）底にあった「うしろよりにらむものありうしろよりわれをにらむ青きものあり（明治45年4月の短歌）」の火口湖を、人間の子のように地上から見たのなら、又三郎の立った位置は、8合目を過ぎた1800 mより高い不動平の鞍部付近のダケカンバ林である。神の子の視点である上空からであっても、ダケカンバ林の中に1480 mの2つの「睨む青い目」が見えたはずである。この白樺はダケカンバである。

『修学旅行復命書』の北海道大学植物園に関わる報告文は、「階上のアイヌに関する標本並に札幌附近雑草の標本亦よき教材なり。後者はしらねあふひ、ちごゆり、はくさんちどり等殆ど岩手山の二三合目の植物にして、実之等二地が花巻と比較して年平均四度位低温なること及植物の垂直水平両分布を説明するものなり。」である。亜高山帯のラン科のハクサンチドリ生育地の多くは自然保護区に指定され、各地のブナ林のシラネアオイも保護の対象になっているに違はなく、これらを「雑草」と記したことは、農学を学んだ賢治らしい。畑地雑草や水田雑草のように作物や林木の成長の障害になる草本や人間の利用と無関係な草本が雑草なのである。

ここで賢治は、現在の植物生態学でいう植生帯の垂直水平分布に相当する「植物の垂直水平両分布」について生徒に説明している。当時すでに、植物の水平垂直分布を扱った『日本森林植物帯論』（本多、1912）の「内地及び北海道ノ重要林木垂直域表」には、「ハイマツ帯」「寒帯：シラビソ帯」「温帯林：ブナ帯」「暖帯林：シイ・カシ帯」に沿って樹木の分布範囲が示されている。同書には、水平分布を示す「大日本森林植物帯図」も掲載されている。したがって、賢治の知識には確固とした裏付けがあったのである。

岩手山の2.5合目登山道の標高が640 m、花巻の標高が70～100 mで、標高差は550 mほどにな

る。仮に、花巻と岩手山の緯度による気温差を無視すると、登山道と花巻の差は、平均的な気温減率 $0.6^{\circ}\text{C}/100\text{m}$ では 3.3°C に、岩手山の実測減率 $0.62^{\circ}\text{C}/100\text{m}$ （日本地誌研究所編、1973）では 3.4°C になる。花巻と岩手山の緯度差などを考慮すると、気温差 4°C の賢治の計算は、ほぼ妥当なのである。

チゴユリとシラネアオイの生育地は、ミズナラ林帯からダケカンバ林帯であり、2.5合付近に分布する。ハクサンチドリは、より高標高のダケカンバ林帯の亜高山帯が中心である。

3. シラカンバと好摩

『春と修羅』の詩〔小岩井農場〕の「パート三」に、「向ふの畑には白樺もある／白樺は好摩からむかふですと／いつかおれは羽田県（属）に言っていた／ここはよつほど高いから／柳沢つづきの一帯だ／やつぱり好摩にあたるのだ」と、シラカンバが描かれ、「向ふの畑」のシラカンバは、牧草地周囲の林縁の植生景観である。「好摩のむかふ」は、シラカンバの分布に関する自らの知識を県の役人に披瀝したことの記憶である。柳沢の標高370 mと同じ高さの小岩井農場の地点は、網張温泉への県道219号線と柳沢から滝沢への県道276号線の分岐付近である。この高度は、標高210 mの好摩からさらに北方にあるシラカンバ林が成立していた地域の高度に当たるといえるのである。そこには、賢治にとってよほど印象深かったシラカンバ林があったと考えられる。

オホーツク挽歌シリーズの詩〔鈴谷平原〕の詩句「まつすぐに天に立つて加奈太式に風にゆれ／また夢よりもたかくのびた白樺が／青ぞらにわづかに新葉をつけ」では、真っ直ぐに伸長した若木が風にゆれる様と、8月のサハリンの葉が新葉のようだと描かれる。そしてシラカンバ一斉林の景観を捉えた賢治の心象は、一転して岩手の冬の景観が詩想表出の比喩となる。それが2字さげの詩句「（うしろの遠い山の下からは／好摩の冬の青ぞらから落ちてきたような／すきとほつた大きなせきばらいがする／これはサガレンの古くからの

誰かだ）」である。どうやら、シラカンバに関わった賢治の心象的な記憶映像は、好摩を基点とする「空間（地域）」と結びついていると考えられる。

作品に登場する好摩以遠の地域は、『補遺詩篇Ⅱ』の詩〔奥中山の補充部にては〕の奥中山と『家長制度』の丹藤川上流域であろう。しかしながら、それらの作品にはシラカンバが登場しない。

「白樺は好摩からむかふです」というシラカンバに関する賢治の認識をそのまま地理的に展開すると、原点の小岩井農場の北部から柳沢と好摩を結ぶ北東の先には、作品にも登場する姫神山の北麓と丹藤川流域の北上山地がある。植生図（岩手県、1981；参照した植生図に付された発行年）によると、その地域は、第二次世界大戦後に造林されたカラマツ植林地（アカマツ植林地も）が広大な面積を占めている。カラマツ植林地はかつての薪炭林や放牧地であったと推定され、そこでは、度々の火入れによるシラカンバの優占群落が出現したり、放牧地周囲にシラカンバの高い出現頻度の林縁群落が出現したり、まさにシラカンバ地帯の植生景観がみられたのであろう。

VI 賢治が選んだ装景樹

1. 装景

賢治が使用した「装景」のルーツが田村（1918）の『造園概論』であることは、鈴木（1997）や森本（1998）によっても明らかにされている。『造園概論』があくまでも造園学を主題とした著書であると断りながら、人類の植物利用について、植物原料生産の理論と方法を講ずる学問に、主として草本の利用を研究する農学と、木本の利用を研究する林学があると、著者の田村は説きはじめる。これに続いて、「植物の実用的方面に対して、其の美的方面を利用するものがある。余は之を総称して、「風景装飾術」或いは「装景術」と名づける（原著の引用部のみ「装」と記す）」と「装景」に定義を与えている。総頁270頁の各所で、装景の概念、造園学と装景の関係、装景の美学などについて、多様な議論が展開されている。賢治作品の中の装景を論じた鈴木（1997）は、田村の装景

(Landscape Architecture)が広義の造園(筆者注：いわゆる都市計画や地域景観計画に相当する分野までを含む)と同じ内容をもつことを理解した賢治の作品が詩篇〔装景手記〕であると述べた。しかしながら、花壇の設計や施行に最後まで執着した賢治が、それらが造園と呼ばれるべきものか、装景と呼んでよいのか、内容と表現に戸惑いをもったとも指摘した。〔装景手記〕には、農村改造計画のような詩句もあり、花壇や庭園の造営などに比し、装景における景観計画は、発想も対象空間のスケールも桁違いに大きいと考えた賢治の詩想を読みとることができる。

一方、『三原三部』第二部の詩句「こんどは所謂この農園の装景といふことをしませう／まづ第一にこの庭さきのみづきがあんまり混んでゐて／おまけに桜や五葉松までぎっしりで／大へん狭く苦しい感じがしますから／これをきれいに整理しませう」は、「所謂」を付した装景がある。農園の樹木(樹種からみて植木類)の間伐整理を装景と呼んでいる。この場合は造園である。

造園とは直接的な関連のない装景の例が、『春と修羅 第二集補遺』の詩〔滝は黄に変わって〕である。その詩句、「もっともさういふいたやの下は／みな黒緑の犬檻で／それに溪中申し分ないいい、石ばかり／何たる巧者な文人画的装景だらう」では、雷雲に覆われ雷鳴もとどろく溪谷の景観を切り取り、それを文人画の技法で描かれた風景画に喩える。この場合の装景は、自然の風景の絵画的な構成に対して用いられている。

いずれにしても、装景という用語に込めた賢治の思案には、農村の風景改善(=景観計画)が含まれていたと考えられる。植物の実用的利用に関わる農林学から派生した、植物の美的側面に関わる装景を賢治がどのようなものと理解したかは、修学旅行復命書の「寔に田園を平和にするもの樹に超ゆるなし」に端的に表れている。

2. 賢治の装景

(1) 作品にみる装景

修学旅行のほぼ2ヶ月前1924年3月24日の日

付をもつ『春と修羅 第二集』の詩〔丘陵地を過ぎる〕では、棚田があったり、アカマツ林があったりする丘陵地帯のいわゆる中山間地に相当するところの庭園の植樹計画、あるいは農地を含めた屋敷(宅地)の植栽計画が語られる。その計画には「木を植える場所やなにかも決めるから／ドイツ唐檜にバンクス松にやまならし／やまならしにもすてきにひかるやつがある／白樺は林のへりと憩みの草地に植ゑるとして／あとは杏の青白い花を咲かせたり」と、修学旅行復命書の3種、ドイツトウヒ、ヤマナラシ、シラカンバがそろってリストアップされる。続く詩句が「きれいにこさえてかないと／お嫁さんにも済まないからな」など、まさに平和な農村風景のプランニング、つまり、集落景観計画を意味する装景の考えが表れている。

このプランニングを具体的にイメージさせる植栽計画図(図1)が『銀行日誌手帳』の107頁に残されている。手帳紙片の地にはグリッドが印刷され、その9メッシュを1メッシュとしたスケールで、アメリカヤマナラシ(=ポプラ)が南東の区劃に3個体(マークが1個体として；以下同じ)、

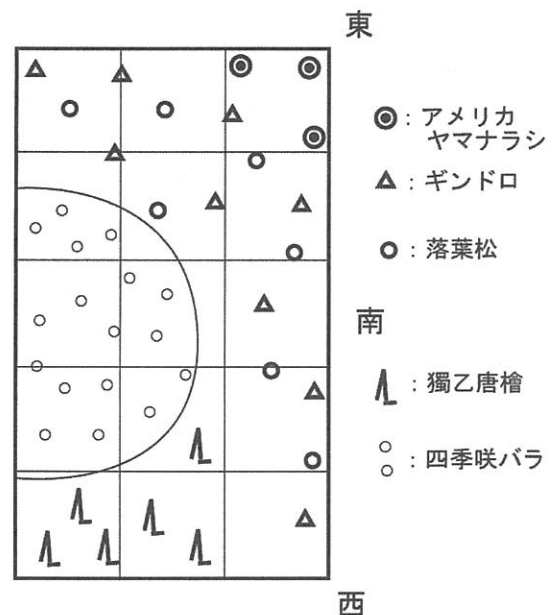


図1 植栽計画図
原図では、樹木記号から直接引き出された線に添えて名称が記される。

北西の区劃にドイツウヒが6個体、北東から南西への区劃にギンドロとカラマツの混植区劃、北の中央に四季咲きバラの区劃が配置されている。

発刊年の1929年から判断すると、賢治が目にしたかは疑わしいが、『造園概論』の著者田村(1929)の『森林風景計畫』にみられる「落葉松は天然林としても、人工林としても多く一齊林を形成して現れ、(中略)新緑と紅葉との美は、針葉樹としては特色に富めるものといへる。殊に白樺を混淆せしめた場合の色彩美に至っては、他に類の乏しいものである」は、ギンドロとカラマツの混植区劃の景観を髣髴とさせる。

メッシュの単位が記されていないが1間(1.8m)とすると、13㎡ほどの四季咲きバラの半円形植込を除き、いずれも高木種のドイツウヒが3.3㎡に2個体、ポプラが4個体など、稚樹や若木のステージなら許容されても、早急に成長阻害が生じる。亭々と聳えるドイツウヒやポプラの景観は、賢治のイメージにはなかったであろう。ただし、スギ植林における苗木の平均的な植栽密度が1haに3000本とすると、林学をも学んだ賢治の植栽密度の計算は適切なのである。

この図にシラカンバが欠けている。理由は、当時の苗木の生産と入手に関わると推察される。ポプラ、ギンドロ、ドイツウヒは造林、製紙原料、庭園樹、街路樹などの有用樹であったので、苗木は営林署の苗畑など公共の施設から入手するか、挿し木が容易な前2者の苗木は自家生産も可能であった。ところが、シラカンバ苗木の生産はほとんどなかったと考えられる。もし必要なら、自生のいわゆる山採り(山掘り)であったに違いない。事実賢治は、花巻農学校の校地に植えた植物で、生徒等とこれを行っていた(佐藤、1996)。

花巻農学校教師を辞した後の『口語詩篇』の詩「あしたはどうなるかわからないなんて」は、詩句「あしたはどうなるかわからないなんて、／百姓はけふも手を束ねてはゐられない」に続けて、「折靴など誰がかゝえてあるいても、／木などはぐんぐんのびるんだ」と記され、いわゆる小官吏のあくせくした働きに関わりなく樹木が生長する

のとは対照的に、農民の労働は、明日の心配事に思い悩む寸暇もないという。途中に「イギリスの百姓たちの口癖は／りんごなら／馬をうめるくらゐに掘れ／馬をうめるくらゐに掘れだ」とあったり、さらに「喧嘩」や「喧嘩の相手」などの語句があったり、賢治は、何かに鬱屈した感情を持ち、それを何かに打ち付けたい衝動をもったようである。

詩「あしたはどうなるかわからないなんて」の校異篇の下書稿(一)に「閃く」ギンドロの特徴と植栽を表現した以下の詩句がある。

どうなるかわからないといふのなら／なんにもないさ／植えろ植えろ／やっさもっさと云っているうちに／木などはぐんぐんのびてしまふんだ／銀ドロの葉をひらめかし／(中略)／

まづ喧嘩してもっと楽にしてからといふのなら／銀ドロなどやめてしまへ／花だの木だの植えて／ひとをなだめて喧嘩をするのをやめさせやうなんて／おれはそんなけちな人間ではない／喧嘩をするものしないもの／眼をいつも人間に向けて／きろきろしてゐるものと／自然に向けて／ほうとしてゐるものとは／強制されない限り／大ていはいうまれつきだよ

賢治の鬱憤の中身を表している。放っておいても成長する木がギンドロであったことがわかる。「田園を平和にする」樹や花を植えて、争いのない地域(下根子集落か)にしようとしたが、そんな「術」が通じると考えた自分に立腹したのである。自分の本性は、世間の監視への配慮などではなく、自然への関心にあるというのが、賢治の言い訳である。植樹や花壇で集落景観(=地域コミュニティ)をつくるのが、人々の精神文化までも変えられるということを、賢治が、田村(1918)の装景に、確かに見つけ出していたことを推察させる。

(2) 装景樹の選定一理由と背景をめぐって一

多様な岩手県の植物や植生から、いわば装景樹

として上記の3種、シラカンバ、ドイツトウヒ、ポプラ（ポプラの出現頻度（作品数）が、ギンドロやヤマナラシより高い。修学旅行復命書の表記はヤマナラシであるが、ヤマナラシ属を代表させる装景樹にはポプラが適切である）を賢治が選んだ理由はなんであろうか。

作品に描かれたこれら3種、実際にはカバノキ属、トウヒ属、ヤマナラシ属の種について、植生学的な特徴に加え、賢治の文学的営為の面に留意しながら網羅的に記載し、かつ分析的に扱ったのが前半部であった。ここでの成果に、装景樹選定の理由を探る目的もあった。盛岡高等農林学校入学後、間もなく詠われた短歌群には、「いのり」、「聖木」、「ねがい」など、いわば賢治の精神性の背景を受け取ることができる。とくにシラカンバを詠った詩には、「大乘風」など宗教性を直截的に表す詩句もみえる。しかしながら、同じような宗教的な心象が描かれた一連の短歌群のヒノキ（三浦、2005）もあって、宗教的な賢治の関心が、3種の固有性の証明にはならない。

さらに、ヒノキやオキナグサなどのように、擬人化されて物語の主体となったものはない。『土神ときつね』の樺は、賢治の用意周到な語句から容易にサクラ類と特定できる。個々の作品の内容から装景樹選定の理由を考察することは、はじめから、方法論的な矛盾があった。この方法は、全作品の全植物を分析の対象にして成立するのである。

賢治は、成長のきわめて早いポプラやギンドロを好み、これらを新しい花巻農学校の校地や下根子の羅須地人協会の屋敷地に植えたことが、家族や周囲の言として伝えられてもいる（森、1988）。このように、選定理由を個人的な嗜好とすることにも同意できない。したがって、以下の選定要因の考察は、筆者が立っている植生学や景観学の視点から行った。

要因考察の手掛かりは、はじめから呈示されていたとも言える。それが、「白樺の数幹、正形の独乙唐檜、閃くやまならし」で、シラカンバの樹皮の色彩と樹幹の群（＝木立や林）、ドイツトウ

ヒの円錐樹形、ポプラの樹冠の動態と震動（葉擦れ）である。これらの「いろ」、「かたち」、「うごき」は、多様に変化しながら自然景観や人文景観を構成するとともに、しかも、その景観は時間系列の中でも変化する。新緑、青葉、紅葉などの季節現象の外にも、たとえば、夏の夕暮れ時の微風のそよぎをポプラから聴き取り、夕暮れの光の減衰をシラカンバの白い樹幹群で知り、夜の闇をドイツトウヒの整った黒い影で確認するのである。このような、いわば詩人の自然に向ける審美眼や観照の態度は、盛岡高等農林学校で学び、かつ研究した自然科学の分野から獲得したと考えられる。

その分野の一つが造園学である。賢治の装景について森本（1998）は、景観計画の他に、風景の装飾的側面である装景の「美」や「芸術」をも取り上げて論じている。先述したように、賢治の装景のルーツも、森本の論考の対象も『造園概論』（田村、1918）である。この概論の内容を詳細に検討することは、別稿にゆずるとして、美や芸術に関わる多面的な議論がなされている。序文を寄せた林学者本多静六は、「元来造園は一面科学であると同時に一面は藝術でもあるから、この兩道に通曉した上でなくては、到底其研究の道に入ることが出来ない」と述べる。哲学・心理学・史学、そして美学・美術史・絵画史・建築史などをも修めた著者にして、初めて刊行し得たと賞賛している。

田村の著書には、1918年刊行の『造園概論』と1925年刊行の『造園学概論』があり、賢治が確実に読んだ版は後者である。羅須地人協会時代に賢治から指導を受け、花巻温泉や共立病院の花壇造成を手伝った伊藤与蔵の聞き書きに、借りた本が『造園学概論』であったとの証言がある（大内、2007）。

次が、植物学である。ドイツに留学し、「生態学」や「景観」を訳出造語した植物学者三好の『植物生態美観』（三好、1902）の書名は、植生景観の「美」の記述であることを表している。そのシラカンバの記述は、「獨乙各地の公園などに沢山植ゑてある白樺の林は、冬の月、雪の降った時には格別に能く釣合つて、寒い寂しい趣に見える」

である。ドイツの公園の植生景観に雪月を配した記述は、まさに和魂洋才の趣である。同じ三好(1910)の『日本の植物界』のポプラは、「やまならしの類は樹幹直立し、三角形の葉を着け、樹形は圓錐状を成せるものあり、(中略) 近來我邦にも往々其種植せられたるを見る。該樹は北獨乙の平原にては並木として多く植ゑられ、固有の樹形によりて、遠方より直ちに識別せらる。」と表現され、真っ直ぐな樹幹、円錐形(日本で多く植栽された雄株は、枝が上方に伸び円筒形に近い)の樹形など、賢治の注意を惹くと思われる記述がある。

そして三つが、林学である。20世紀初頭、施業林(人工林)の経済性の追求と美しい森林を造ることが、基本的には同時に達成されると主張したドイツの林学者ザリッシュによって、森林美学が提唱された。これを留学先のドイツから持ち帰った北海道大学の新島善直は、人工林に限らず日本の森林を対象にして、樹木や森林の美学的な観照や林業的な扱いなどについて広範な論考を『森林美学』に著した(新島・村山、1918)。ここには、日本の主要な樹木について、樹冠、幹枝のパターン、樹形、針葉と広葉、色彩、季節変化などの美学的特色が詳しく記載されている。「美學の概説」と題された章があり、「美の概観」、「美の内容」、「美の形式」、「美的感情」などの論述に、全体の13%が当てられている。

上記の三好と新島・村山の著書については、賢治の確実な閲覧の証拠はない。しかしながら、ドイツ文化に高い関心をもっていた賢治(米地・リヒタ、2009)が、留学先のドイツの林学や植物学(植物生態学も)に関する研究成果や、現地の景観が盛り込まれた書籍を見逃すはずがない。また、ポプラもドイツトウヒも、そのドイツ(ヨーロッパ平原)に連なる外来種である。岩手県に自生するシラカンバを含むカバノキ類は、ユーラシアから北アメリカの温帯と亜寒帯に分布し、その白い肌の樹幹は、周北極域に住む人々に共有される美なのである。

これらの著書が、賢治の装景樹の選択に重要な

役割を果たしたと同時に、林学や造園学などの発展段階といった時代背景があろう。典型例を造園学にみよう。1916年から1917年にかけて、東京駒場農科大学(現東京大学農学部)に造園学が、千葉高等園芸学校(現千葉大学園芸学部)において庭園学が、北海道帝国大学農学部において前述の森林美学が、東京美術学校と東京帝国大学工学部において庭園学が講じられ、「造園学」という名称も当時確立したという(関口、1987)。賢治が盛岡高等農林学校の二年生から三年生であったこの時期に、賢治作品を特色づける造園学に関わる分野の科学的リテラシーの基礎が獲得されたに違いない。そして、花壇の設計や造成などを実践したいわゆる羅須地人協会時代の2年前の1924年に、より実践的な造園を専門とする東京高等造園学校(現東京農業大学)が創設された(関口、1987)。このような造園学の確立と展開に対応した賢治が、そこから獲得した情報を作品に適用したのだと考えられるのである。

おわりに 一挫折した装景と実現した装景 一

花巻温泉の南斜花壇の設計や施工に関わる賢治の指示事項が書かれた、1927年4月付けの2通の書簡が知られている。温泉に就職したばかりの花巻農学校の教え子富手一にあてたものである。

2通の書簡には、装景樹について、立地環境や装景上の指示がなされている。たとえば、カシワ、ハンノキ、ポプラ(アメリカやまならしと記す)、シラカンバ(しらかばや白樺ではなく「しらかんば」と図鑑の和名を記す)は、土地改良(耕起施肥、客土などであろう)を施さなくとも任意の場所に植えられるので、このような園地の植栽最適樹であると言う。ドイツトウヒは、既存のA層を残した土壌にさらに施肥し、冬期の季節風を避けた場所に植栽するよう指示する。ポプラとシラカンバの「アメリカやまならしの巨葉のもの、家屋東南方に栽うれば晨光時漣波の如くに燦く。しらかんばは暗緑林前疎立すべく亦高地に群落を作るべし」、ドイツトウヒの「空処に散点せしむるか或は淡緑林前正しき排列を欲す」、ギンドロの「ぎ

んどろと落葉松の混植最美観を呈す」には、賢治の装景樹の植栽基準が明示されている。賢治の思い描いた「田園を平和にする樹」による景観計画案である。しかしながら、花壇は実現したが、一帯の景観計画は実施されなかった（伊藤2001；岡村、2008）。

修学旅行復命書の「而して之を救ふ」植物中の「赤き鬼芥子の一群」を植えて景観を整えること、つまり花壇の設計と施工も装景なのである（田村、1918）。賢治が設計したり、施工に関わったりしたといわれる花壇は、花巻温泉の外にも知られている（佐藤、1993）。

「田園を平和にする樹」でもあった集落の屋敷林、社寺林などの歴史的に保存されてきた大径木が、軍需のための供木として、その景観から消し去った時代が、賢治の装景構想を吹き飛ばして、足早に近づいたのである。装景樹が岩手に広く植栽されたのは、第二次世界大戦後の高度経済成長が達成されつつあった1970年代である。

その実現された植生景観が、賢治も訪れた水沢緯度観測所の構内にある。洋風建築の旧本館（現奥州市宇宙遊学館）の西側には大径木のポプラの一群が、裏庭の一画にはシラカンバの若木（成長が早く更新が不可欠）数本が、本館の西にある付属舎の北側には、『チューリップの幻術』の茂みを髣髴とさせる若木のドイツウヒの高垣が、旧本館分館（現木村記念館）の前庭には、成木のド



写真2 旧水沢緯度観測所本館裏側（奥州市宇宙遊学館）
（2009年9月）
建物背後の樹冠上部がポプラ、テニスコート右手にシラカンバ。



写真3 旧安代町（八幡平市）のシラカンバ・アカマツ林
（2009年9月）

イツトウヒの植込が、欧米文化に憧れをもった賢治が想定したに違いない景観を形成している（写真2）。

賢治がシラカンバの作品を生み出していた当時の岩手県（シラカンバの分布域）では、どこでも目にすることができたに違いない植生景観が、旧安代町（八幡平市）の旧津軽街道（鹿角街道ともいう）の国道282号線沿いにある。シラカンバとアカマツは直径10 cmから15 cmの若い個体で、薪炭林（コナラ林）の伐採跡地に成立した群落である。写真3の右手から張り出した直径が20 cm以上のコナラや萌芽樹形のシラカンバは、薪炭林からの残存個体であろう。

文化庁文化財部記念物課（2005）が監修した『日本の文化的景観』には、「宮沢賢治に関する文化的景観」が複合景観の重要地域に挙げられているが、集落景観や植生景観への言及はない。そこには、将来への展望として、「賢治の原風景を後世に残したいとする地域住民及び宮沢賢治愛好者の声は大きく、今後とも景観の維持に向けて模索が続けられていくものと考えられる」と書かれていた。装景樹の景観は、まさに「賢治の原風景」である。確かに、生き物が主体の植生景観の維持はきわめて難しい。しかしながら、装景樹の植生景観の多くは、人々の様々な管理下で維持される人為植生がつくる文化景観なのである。とすると、その維持の重要な要件は、地域住民の意識と行動であろう。そして、ここでの記述や考察が、その

「意識と行動」を後押しすることを願う。

文 献

文化庁文化財部記念物課監修 (2005)：日本の文化的景観
ー農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査報告書ー，同成社。

深津 正・小林義雄 (1993)：木の名の由来，東京書籍。

本多静六 (1912)：日本森林植物帯論，三浦書店。

岩手県 (1981)：第2回自然環境保全基礎調査植生調査報告書。

岩手県緑化推進委員会巨樹・名木等調査部会編 (2001)：岩手の巨樹・古木ー後世に引き継ぎたいみどりの遺産ー，岩手県緑化推進委員会、盛岡。

岩手植物の会編 (1995)：岩手山の植物ー改訂版ー，熊谷印刷出版部、盛岡。

伊藤光弥 (2001)：イーハトーヴの植物学ー花壇に秘められた宮沢賢治の生涯ー，洋々社。

牧野富太郎 (1940)：牧野日本植物圖鑑 (1977年復刻版)，北隆館。

宮城植物の会・宮城県植物誌編集委員会 (2001)：宮城県植物目録，仙台。

三浦 修・平塚 明 (2004) 宮沢賢治作品の「希少植物」にみる里山の変化，総合政策，5 (3)，411-428，岩手県立大学総合政策学会。

三浦 修 (2005)：宮沢賢治作品に描かれたヒノキ科の植物と植生，総合政策，6 (3)，249-263，岩手県立大学総合政策学会。

三浦 修 (2006a)：宮沢賢治作品の野火と山火ーイーハトーヴの草原景観をつくった火入れと三年輪採ー，総合政策，7 (2)，153-169，岩手県立大学総合政策学会。

三浦 修 (2006b)：環境教育教材としての宮沢賢治作品を読む，イーハトーヴ自然学 (平成17年度岩手県立大学学術研究費 (展開・戦略的研究) 研究成果報告書)，3号，77-93，「自然地理・生態学的手法による賢治作品の分析とその環境教育への適用に関する研究」研究グループ、岩手県立大学。

宮脇昭編著 (1987)：日本植生誌 東北，至文堂。

三好 学 (1902)：植物生態美観 (全)，富山房。

三好 学 (1910)：日本の植物界，丸善。

森莊巳池 (1988)：ふれあいの人々宮沢賢治，熊谷印刷出版部、盛岡。

森本智子 (1998)：宮沢賢治と「装景」ー庚十公園林を中心にー (再掲論文)，宮沢賢治研究Annual，8巻，247-257，宮沢賢治学会イーハトーヴセンター。

村田孝介 (1948)：散村の屋敷形態に就いてー陸中紫波地方の例ー，東北地理，1巻1号，5-9。

新島善直・村山醸造 (1918)：森林美学 覆刻版，成美堂書店、東京。

日本地誌研究所編 (1973)：地理学事典，二宮書店。

大内秀明編著 (2007)：賢治とモリスの環境芸術ー芸術を

もてあの灰色の労働を燃せー，(有)時潮社、東京。
岡 恵介 (2009)：北上山地の景観と環境ー山里の暮らしが作った景観，季刊東北学，20，46-57。

岡 秀一 (2000)：偏形形態のタイプとその成因，気候景観，7-13，古今書院。

岡村民夫 (2008)：イーハトーヴの温泉学，みすず書房。

小野隆祥 (1982)：宮沢賢治 冬の青春ー歌稿と「冬のスケッチ」探求，洋々社。

大場達之 (1999)：奥羽山脈・和賀山塊の植生，和賀山塊の自然ー和賀山塊の学術調査報告書，8-76，和賀山塊自然学術調査会、秋田。

大住克博 (2005)：人為攪乱と二次植生景観ー草原と白樺林ー，大住克博・杉田久志・池田重人編、森の生態史ー北上山地の景観とその成り立ちー，54-72，古今書院。

佐藤 進 (1993)：賢治の花園ー花巻共立病院をめぐる光太郎・隆房ー，地方公論社、盛岡。

佐藤隆房 (1996)：私家版 宮沢賢治ー素顔のわが友ー，桜地人館、花巻。

関口鉄太郎 (1978)：わが国における公園緑地の発達，京都大学造園学研究室編造園の歴史と文化，258-295，養賢堂。

菅原亀悦編著 (1993)：岩手の樹木百科，岩手日報社、盛岡。

須田 裕・武田豊蔵・菊池京子 (1997)：教育学部周辺および自然観察園の樹木配置図，岩手大学教育学部生物学教室植物形態・分類学研究室、岩手大学。

鈴木 誠 (1997)：宮沢賢治のとらえた「造園家」と「装景家」，ランドスケープ研究，60 (5)，421-424。

田村 剛 (1918)：造園概論，成美堂、東京。

田村 剛 (1929)：森林風景計畫，成美堂、東京。

辻井達一 (1995)：日本の樹木ー都市化社会の生態誌，中公新書。

辻井達一 (2006)：続・日本の樹ー都市化社会の生態誌，中公新書。

八重樫良暉 (1999)：ーいわてー樹木百景，岩手日報社。

米地文夫・ウヴェ リヒタ (2009)：宮沢賢治が創った「ケンタウル祭」の由来と意義ー短歌や「銀河鉄道の夜」とドイツ語・ドイツ文化との関わりをめぐるー，総合政策，11 (1)，13-31，岩手県立大学総合政策学会。

本文中に引用した宮沢賢治の作品等は、『新校本宮沢賢治全集』(筑摩書房、1995~2001)によった。学名は、『日本の野生植物 木本ⅠおよびⅡ』(平凡社、1989)と『植物の世界15』(朝日新聞社、1997)に準じた。

(2009年12月2日原稿提出)

(2010年3月5日受理)

Landscape Architecture Trees and Vegetation Landscape in Kenji Miyazawa's Works: *Betula platyphylla* var. *japonica*, *Picea abies* and *Populus × canadensis* That Make Rural Landscape Peaceful

Osamu MIURA

Abstract

In May 1924, in a report about the school excursion to Hokkaido he had attended as a teacher, Kenji Miyazawa wrote that the rural region in Iwate had a complicated, gloomy landscape as compared with those in Hokkaido, which had been developed after the township system in the United States. He believed that he could improve the gloomy landscape in Iwate's rural landscape by planting three trees, *Betula platyphylla* Sukaychev (Miq.) var. *japonica* Hara, *Picea abies* (L.) H. Karst and *Populus × canadensis* Moench. This is what we call "landscape planning" today, but Miyazawa took this idea from the concept of "sokei" (landscape architecture) shown by Tsuyoshi Tamura in 1918. In this article, the author calls these trees of three genera *sokeiju* (landscape architecture trees), analyzes the way Miyazawa depicted them in his works, and examines how he chose them as *sokeiju* from among the diverse species of plants in Iwate.

In those days, when the burning of grassland and pastureland and the periodic felling of trees for firewood and charcoal were widely practiced, *Betula platyphylla* Sukaychev (Miq.) var. *japonica* Hara, a common and pioneer species of secondary forest in Iwate, occurred mainly at the foot of Mount Iwate as well as in the middle and northern parts of the Kitakami Mountains. Therefore, this species appears in many of Miyazawa's works, and the vegetation landscape (from natural to secondary to artificial vegetation) in which they are set has the widest diversity among the three species above mentioned.

Populus sieboldii Miq. a native species in Iwate, is found only in one of Miyazawa's works (a short novel), which mentions artificial vegetation landscape such as secondary forests at the foot of hills and orchards. Other species of this genus, introduced species of *Populus × canadensis* Moench and *Populus alba* L. appear in works that are set in artificial vegetation landscape ranging from urban to rural regions. The number of works in which *Picea abies* (L.) H. Karst, an introduced species, appear is the least among the three species. Because, *P. abies* (L.) H. Karst was primarily planted to botanical garden of the Morioka Agriculture and Forestry College, windbreak of a railroad or arable land and western style gardens.

Miyazawa left poems and short novels that allow the author to assume that he developed draft plans for landscape architecture using the trees he selected, but there is no evidence that such plans were carried out. Nor did the social situation at that time allow anyone to implement such landscape plans whether in rural communities or urban areas.

In those days, studies were already being conducted to elucidate the aesthetic aspects of trees and forests, contemplate their beauty, ensure reasonable forest management, and create attractive forest landscape (Miyoshi, 1902; Nijima & Murayama, 1918). Miyazawa learned about these studies at the Morioka Agriculture and Forestry College and developed landscape plans for rural communities using the *sokeiju* he selected.

Key words

Kenji Miyazawa, *Sokei* (landscape architecture), *Betula platyphylla* Sukaychev (Miq.) var. *japonica* Hara, *Picea abies* (L.) H. Karst, *Populus × canadensis* Moench